

Measure for Measure の言葉について

内 山 倫 史

(1)

Brian Vickers は *Measure for Measure* の韻文が、*All's Well* より卓越していて散文もまた力強いことを指摘している⁽¹⁾。E. M. W. Tillyard は、この劇の第3幕第1場151行までは言葉が極めて詩的であり、中にちりばめられた生き生きした散文によって、詩がひきだされていると述べている⁽²⁾。また、J. M. Nosworthy は、*Measure for Measure* の文体が、この劇の素材に合うようにすばらしくよくできていると言っている⁽³⁾。

この小論では、*Measure for Measure* の主な登場人物の言葉に焦点をあて、彼等の言葉が、性格描写に、また、劇の雰囲気醸成に、いかに重要な役割を演じているかを考察を加えてみたい。

(2)

まず、公爵の言葉を取り上げてみよう。第一幕第一場、開幕冒頭で、老貴族 Escalus に述べる彼の台詞は、語彙、詩の調子からいって、「問題劇」の言葉の特徴をはっきり示している。

Of government the properties to unfold
Would seem in me t'affect speech and discourse,
Since I am put to know that your own science
Exceeds, in that, the lists of all advice
My strength can give you. Then no more remains
But that, to your sufficiency, as your worth is able,
And let them work. The nature of our people,
Our city's institutions, and the terms
for common justice, y'are as pregnant in
As art and practice hath enriched any
That we remember. There is our commission,
From which we would not have you warp. (I. i. 3-14)

B. I. Evans は、「問題劇」において、韻文は、ある論の制約を受けて、言葉のゆるやかな流れが失われていることを指摘しているが⁽⁴⁾、公爵のこの台詞もいきなり一つの提議に入っている。“Of government……”という倒置構文で始めたため、リズムは不規則であるが、そのため「政治」の主題が強調され、更に、具体的に、「国民の性質」(9行)、「国家の制度」(10行)、「裁判の手続き」(10行11行)という言葉がたたみかけられ、その主題が一そう浮き彫

りにされている。*Measure for Measure* の主題が、政治に携わる者の寛容、慈悲、許しの美徳を謳い上げることにあることを考えると、ここに已にこの劇全体の基調が見事に打ち出されている。

次いで、同幕同場、Angelo が登場すると、公爵は次のよう話しかける。

Thyself and thy belongings

Are not thine own so proper as to waste
Thyself upon thy virtues, they on thee.
Heaven doth with us as we with torches do,
Not light them for themselves ; for if our virtues
Did not go forth of us, 'twere all alike
As if we had them not. Spirits are not finely touch'd
But to fine issues ; nor nature never lends
The smallest scruple of her excellence
But, like a thrifty goddess, she determines
Herself the glory of a creditor,
Both thanks and use. (I. i. 29-40)

R. Miles は、*Measure for Measure* において、公爵の役割が、ただ単に舞台監督助手としてのみならず、劇の世界の道徳の規範になっていることを指摘している⁽⁵⁾。公爵のこの台詞は、「美徳」という言葉を中核語として、それについての説明が大袈裟な言葉でなされ、炬火の比喩とともに、Angelo に対していわば呪文にも似た効果を与えている。

更に、第一幕第三場、公爵が、修道僧 Thomas に、変装のため僧服を借りる時の言葉をみてみたい。

We have strict statues and most biting laws,
The needful bits and curbs to headstrong jades,⁽⁶⁾
Which for this fourteen years we have let slip ;
Even like an o'er-grown lion in a cave
That goes not out to prey. (I. iii. 19-23)

この前の場で、死刑を言い渡された Claudio は、人民を馬に、統治者をその馬の鞍に乗った人に譬えているが⁽⁷⁾、ここでも公爵は手に負えない人民を「悍馬」に譬え、また、法令や法律を「洞穴にこもった年老いた獅子」に譬えている。C. F. E. Spurgeon は、この劇に含まれる 138 のイメージのうち、真に詩的なものは僅か 18 しか数えず、これに対し、グロテスクなイメージが 27 も用いられていると述べている⁽⁸⁾。しかし、この「洞穴にこもった年老いた獅子」のイメージは、今まで厳格な法律の価値を認めながらその適用を怠り、身を隠す公爵の姿と二重写しになり、不自然でグロテスクなイメージは、この劇では却って極めて機能的な働きをしている。

さて、ここで公爵の散文について考察を加えてみたい。A. P. Rossiter は、第三幕第一場で公爵が散文を話し始めてから、緊密なイメージや、感情を喚起する言葉に満ちた文体が急に変化することに言及しているし⁽⁹⁾、Milton Crane は、修道僧に変装した公爵の散文のきわだった用い方に注目している⁽¹⁰⁾。第三幕第一場、Isabella と Claudio の韻文での激しい対話のあと、それを立ち聞きしていた公爵は、立ち去ろうとする Isabella を引き止め、まず

Claudio に次のように話しかける。

Son, I have overheard what hath passed between you and your sister. Angelo had never the purpose to corrupt her ; only he hath made an assay of her virtue, to practise his judgement with the disposition of natures. She, having the truth of honour in her, hath made him that gracious denial which he is most glad to receive. I am confessor to Angelo, and I know this to be true ; therefore prepare yourself to death. Do not satisfy your resolution with hopes that are falible ; tomorrow you must die ; go to your knees, and make ready. (III. i. 159-169)

159 行から 165 行までの静かで、流れるような散文は、修道僧に変装した公爵が、死を前にした Claudio を諄諄とさとすのに極めてふさわしい文体である。166 行から 169 行までの散文は、急に調子を変え短い文をたたみかけている。「お前さんも死ぬ覚悟をなさるがよい。」「せっかくの決心をくだらぬ希望で駄目にしてはなるまい」「明日は死なねばならぬその身」「さ、ひざまづいて」「心構えをしっかりとしておくように。」——これらの言葉は、なだらかな文との対照により、いっそう Claudio の心に印象づけられ、彼に死出の旅への覚悟をさせるのに見事な役割を果たしている。

この直後、公爵は典獄に席をはづすように頼み、Isabella にこう語りかける。

The hand that hath made you fair hath made you good. The goodness that is cheap in beauty makes beauty brief in goodness ; but grace, being the soul of your complexion, shall keep the body of it ever fair. The assault that Angelo hath made to you, fortune hath conveyed to my understanding ; and, but that frailty hath examples for his falling, I should wonder at Angelo. How will you do to content this substitute, and to save your brother? (III. i. 179-187)

公爵の Isabella に対する散文は、Claudio の時とはことなり非常に技巧的になっている。彼は、同じ構文のくり返しや、修辞学の“antimetabole”⁽¹¹⁾を用い、均斉のとれた散文で、論理的に Isabella を説得しようとしている。この場の直前、彼女が兄に対して激しい言葉で美德を力説したことを考えると、この散文は、彼女の気持を冷静にさせるのに、また、その内容が美德の大切さを説いている点、極めて効果的である。

更に、公爵は次のように言葉を続ける。

I do make myself believe that you may most uprightly do a poor wronged lady a merited benefit ; redeem your brother from the angry law ; do no stain to your own gracious person ; and much please the absent Duke, if peradventure he shall ever return to have hearing of this business. (III. 1. 198-203)

この台詞の中でも、公爵は修辞学の“propositio”⁽¹²⁾の技巧を用い、ある計画を実行することから生ずる利点を Isabella に説きつけている。

しかし、公爵が偽善者 Angelo のことに触れる時、彼の感情の高ぶりとともに、この均斉のとれた飾りのない散文の中に、イメージが現れてくる。彼は、Angelo が恋人に対し、いかにひどい仕打ちをしているかを Isabella にこう語っている。

Left her in her tears, and dried not one of them with his comfort : swallowed his

vows whole, pretending in her discoveries of dishonour : in few, bestowed her on her own lamentation, which she yet wears for his sake ; and he, a marble to her tears, is washed with them, but relents not. (III. i. 225-230)

「慰めの言葉一つかけようとしなさい」というところを, “tears” (225行)の縁語で “dried not one of them with comfort” (*italics* は筆者)と述べたり, 「婚約をきれいに取り消した」というのに, “swallowed his vows” (*italics* は筆者)と述べている。また, “marble” (229行)の比喩を用いて, Angelo の冷酷な性格や, それに対する公爵の怒りを見事に浮き彫りにしている。イメージは, Angelo のことを話し続ける公爵の台詞にずっと現れる。もう一つ例をあげてみたい。

Duke. It is a rupture that you may easily heal : and the cure of it not only saves your brother, but keeps you from dishonour in doing it.

Isab. Show me how, good father.

Duke. This forenamed maid hath yet in her the continuance of her first affection. His unjust unkindness, that in all reason should have quenched her love, hath, like an impediment in the current, made it more violent and unruly. (III. i. 235-243)

この台詞で, 公爵は, 「破棄された約束を元にもどす」ことを傷の治癒のイメージで, また, Mariana の愛情の激しさを「さえぎられた流れがいつそう激しくたぎりたつ」比喩で鮮かに描き出している。

最後に, 第三幕第二場, Escalus と散文で話をしたあとの公爵の独白をみてみよう。

He who the sword of heaven will bear
Should be as holy as severe :
Pattern in himself to know,
Grace to stand, and virtue, go :
More nor less to others paying
Than by self-offences weighing.
Shame to him whose cruel striking
Kills for faults of his own liking! (III. ii. 249 ff.)

Milton Crane は, この八音節の対句は, 修道僧に変装した公爵が, 徳について見出した意味を格言風に要約している, と述べているが⁽¹³⁾, 今までの台詞と全く異なる公爵のこの言葉は, 実人生の経験をした彼の内面の発展を示していると言えないであろうか。J. M. Nosworthy は, この台詞に言及して, 公爵が遂に良き政治の原理を会得したと言っている⁽¹⁴⁾。彼が, 「正義の剣をふる者は峻厳であり, かつ清潔でなければならぬ」とか, 「身を処するに清廉, 事を行うに徳をもってする」と格言的に述べる時, *Measure for Measure* の主題を見事に示している。

(8)

次に, Angelo の言葉をみてみたい。Angelo は, その最初の始めから厳しく冷たい人間として描かれている。公爵は彼のことをこう批評している。

Lord Angelo is precise ;
 Stands at a guard with Envy ; scarce confesses
 That his blood flows : or that his appetite
 Is more to bread than stone. (I. iii. 50-53)

公爵のこの極端ともいえる Angelo の非人間的な性格の強調は、後になって我々が彼の本当の姿を知る時、ドラマチック・アイロニー⁽¹⁵⁾となっている。

まず、第一幕第一場、公爵から留守中の代理に任ぜられる時の Angelo の答えをみてみよう。

Now, good my lord,
 Let there be some more test made of my metal,
 Before so noble and so great a figure
 Be stamp'd upon it. (I. i. 48-50)

Angelo は、自分が公爵代理にふさわしい性格かどうかを貨幣のイメージで尋ねている。「尊い大役を刻印されますように、私の地金をもっとお調べ下さい」——この台詞が、「血がかよっているとさえ思えず、石よりもパンを好むとも思えない」(I. iii. 50-53) Angelo によって言われる時、貨幣のイメージは彼の性格描写にすぐれた役割を果たしている。

次いで、第二幕第一場、あまりにも厳しい法律の実施を批判する Escalus に対する Angelo の言葉をみてみたい。

'Tis one thing to be tempted, Escalus,
 Another thing to fall. I not deny
 The jury passing on the prisoner's life
 May in the sworn twelve have a thief, or two,
 Guiltier than him they try. What's open made to justice,
 That justice seizes. What knows the laws
 That thieves do pass on thieves? 'Tis very pregnant,
 The jewel that we find, we stoop and take 't,
 Because we see it ; but what do not see,
 We tread upon, and never think of it.
 You may not so extenuate his offence
 For I have had such faults ; but rather tell me,
 When I that censure him do so offend,
 Let mine own judgement pattern out my death,
 And nothing come in partial. Sir, he must die. (II. i. 17-31)

法の厳しさをとくこの理性に基いた飾りのない台詞には、峻厳、克己を誇る Angelo の性格が鮮やかに描き出されている。まず、誘惑されることと誘惑に陥ることが別であることから切り出し、次に具体的に陪審員の例をあげ、更に論を補うかのように、もっと分かり易い宝石の譬えを持ち出し、最後に自分に結びつけて、「もしあの男に断罪を宣告する私が、同じように罪を犯せば、私自身の宣告を範例として私を死刑にさせていただきたい」ととく Angelo の論は完璧である。しかし、後で彼が Claudio と同じ罪を犯すことを考えると、この台詞は極めてドラマチック・アイロニーにひびくのである。

ここで、第二幕第二場、Isabellaに会ったあと、自分の心の乱れに驚く Angelo の台詞を取り上げてみよう。

What's this? Is this her fault, or mine?
 The tempter, or the tempted, who sins most, ha?
 Not she ; nor doth she tempt ; but it is I
 That, lying by the violet in the sun,
 Do as the carrion does, not as the flower,
 Corrupt with virtuous season. Can it be
 That modesty may more betray our sense
 Than woman's lightness? Having waste ground enough,
 Shall we desire to raze the sanctuary
 And pitch our evils there? O fie, fie!
 What dost thou, or what art thou, Angelo?
 Dost thou desire her foully for those things
 That make her good? O, let her brother live!
 Thieves for their robbery have authority,
 When judges steal themselves. What, do I love her,
 That I desire to hear her speak again?
 And feast upon her eyes? What is't I dream on?
 O cunning enemy, that, to catch a saint,
 With saints dost bait thy hook ! (16) (II, ii. 163-181)

Derek Traversi は、自分の美德の力で情熱を抑えることができると信じている Angelo の自己認識の欠除を指摘している⁽¹⁷⁾。疑問文の多用、速いリズムで流れるとぎれとぎれの文——この台詞には、自己の本当の姿を知った時の Angelo の驚きがはっきりとあらわれている。「これはどうしたことなのだ?」「これはどうしたことなのだ?」「あの女のせいかな、それともおれのせいなのか?」「悪いのは誘惑するやつかされるやつか?」という疑問文のたたみかけには自己発見の驚きが、また、「日の光をうけて咲く堇のそばで腐っていく死骸」に自分を譬えるグロテスクなイメージには自分に対する嫌悪感が、見事に描き出されている。更に、前の場で、「泥棒が泥棒に対して断罪の宣告をしよう、法はそれに関知しない」(II. i. 22-23)と言った彼が、この場で、「裁判官が盗みをすれば、泥棒だって盗みをする当然の権利がある筈だ」(176行-177行)と叫ぶ時、極めてドラマチック・アイロニーにひびくのである。

更に、第二幕第四場、Isabella に対する思いで心乱れる Angelo は、登場すると次のような独白で内心を吐露する。

When I would pray and think, I think and pray
 To several subjects : Heaven hath my empty words,
 Whilst my invention, hearing not my tongue,
 Anchors on Isabel : Heaven in my mouth,
 As if I did but only chew his name,
 And in my heart the strong and swelling evil
 Of my conception.

The state whereon I studied
 Is, like a good thing being often read,
 Grown sere and tedious ; Yes, my gravity,
 Wherein—let no man hear me—I take pride,
 Could I with boot change for an idle plume
 Which the air beats for vain, O place, O form,
 How often dost thou with thy case, thy habit,
 Wrench awe from fools, and tie the wiser souls
 To thy false seeming ! Blood, thou art blood.
 Let's write good angel on the devil's horn—
 'Tis not the devil's crest, (II. iv. 1-17)

第二幕第一場の台詞が、突然自己の醜悪な面を見出した人間の心の乱れをあらわすものとするれば、静かなリズムで流れるこの台詞は、冷静に自己を見極めようとする者の言葉として見事にその機能を果している。Angelo は、まず、神に祈っても Isabella のことが忘れられない心の苦しみを、“pray”と“think”の二語の位置を巧みに変えて効果的にあらわしている。次いで、「地位よ、格式よ、お前らはその体裁や裁いで馬鹿者を縮みあがらせる」という衣服のイメージで実体と外観のちがいを認識する彼は、「人間は要するに血と肉からできた代物だ」と悟るようになる。最後に、自分自身のこと言及して、悪魔と天使の比喩で、いくら天使然⁽¹⁸⁾としていても自分は悪魔のような人間だ、と自己の実体を見極めている。

最後に、第五幕第一場、裁判の場で、始めは言い逃れしようとしながらも、結局潔ぎよく自分の罪を認める Angelo の言葉をみてみたい。

O my dread lord,
 I should be guiltier than my guiltiness
 To think I can be undiscernible,
 When I perceive your Grace, like power divine,
 Hath looked upon my passes. Then, good prince,
 No longer session hold upon my shame,
 But let my trial be mine own confession.
 Immediate sentence, then, and sequent death
 Is all the grace I beg. (V. i. 364-371)

この飾りのない平易な言葉で語られる台詞は、罪を悔いる人にふさわしい文体である。W. W. Laurence は、Angelo について、「突然訪れた誘惑のために悪に走った人間としてでなく、生れつきの悪者として描かれているようにみえる。」⁽¹⁹⁾ と言っているがこれは極論である。Angelo は、自己の醜悪な面を覗き見て、かえって善悪の観念に目ざめた人間といってもいいだろう。最後の「今は慈悲よりも死を待ち望む心の方が強いのです。死刑は当然の報いです。願ってもない賜物です。」という強い言葉は、如実にこのことを物語っている。

(4)

次に、Isabella の言葉に移りたい。まず、第二幕第二場、兄 Claudio の助命を Angelo に嘆

願する時の彼女の言葉を取り上げてみよう。

There is a vice that most I do abhor,
 And most desire should meet the blow of justice ;
 For which I would not plead, but that I must ;
 For which I must not plead, but that I am
 At war 'twixt will and will not. (II. ii. 29-33)

Claudio は、Isabella のことを、「理路整然と説こうとする時は見事な腕前を示すし、相手を説得する妙手を心得ている。」(I. ii 174-176) と Lucio に語っているが、この台詞はそのことをはっきり示している。まず、悪徳が法の報いで罰せられるのを心から望んでおります。」と切り出して、Angelo の心を引き付ける。次いで、修辭学の首句反復 (anaphora) を用いたり (31行-32行)、相反する言葉 “will” と “will not” を対比させ、兄の処刑には自分の心が動揺していることを強調している。

更に、Isabella の嘆願は次のように続けられる。

Could great men thunder
 As Jove himself does, Jove would ne'er be quiet,
 For every pelting petty officer
 Would use his heaven for thunder ; nothing but thunder.
 Merciful Heaven,
 Thou rather with thy sharp and sulphurous bolt
 Splits the unwedgeable and gnarled oak,
 Than the soft myrtle. But man, proud man,
 Dress'd in a little brief authority,
 Most ignorant of what he's most assur'd —
 His glassy essence — like an angry ape
 Plays such fantastic tricks before high heaven
 As makes the angels weep ; who, with our spleens,
 Would all themselves laugh mortal. (II. ii. 111-124)

E. C. Pettet は、*Measure for Measure* の中に散在する詩的表現に言及して、この台詞の115行から122行までをあげ、これを偉大な悲劇の台詞とみなしうると述べている⁽²⁰⁾。ここには、台詞の調子といい、巧みな比喩といい、兄を助けたい一心の Isabella の切切たる願いが見事にあらわされている。まず、神話の人物 Jove を引き合いに出し、その武器の雷電にうたれる頑丈な樫の木ときゃしゃな灌木を対照させ、正義と慈悲をといている。また、人間のはかなさを「ガラス」(121行) のイメージで⁽²¹⁾、更に、傲慢な人間が束の間の権威をかさにきるのを、人まね、虚栄、無知を象徴する「猿」(121行) のイメージで鮮やかに描き上げている。

Miriam Joseph は、Isabella を、Shakespeare の作品の中における論理の巧みな人物の一人としてあげているが⁽²²⁾、第二幕第二場の兄 Claudio の助命嘆願の場で、彼女の弁舌が Angelo に決定的な打撃を与える箇所を取り上げてみたい。

Because authority, though it err like others,
 Hath yet a kind of medicine in itself

That skins the vice o'th'top. Go to your bosom,
 Knock there, and ask your heart what it doth know
 That's like my brother's fault. If it confess
 A natural guiltiness, such as is his,
 Let it not sound a thought upon your tongue
 Against my brother's life. (II. ii. 135-142)

まず、誤ちは人の常であること、それを覆い隠すのを葉の比喻でとくと、次に、“go to your bosom, / Knock there, and ask your heart” (137行—138行)と力強く単音節語をたたみかけている。その間にただ一語“bosom”という二音節の言葉が挟まれているため、「胸」bosomという言葉がいつそう浮き彫りにされている。「ご自分の胸へ手をあてておきき下さいまし。」——この Isabella の言葉に Angelo の心は揺らぐのである。この直後、Angelo も傍白で、「この女の言うことは胸にこたえる。」(142行 | 143行)と言っている。

Isabella の能弁も、一旦自分の利害に関係すると冗漫なわめきにすぎなくなる。第三幕第一場、死の恐怖に怯える兄 Claudio から、自分の命を救うため Angelo に体を投げ出してくれるように頼まれると、Isabella は憤然として次のように叫ぶ。

O, you beast!
 O faithless coward! O dishonest wretch!
 Wilt thou be made a man out of my vice?
 Is't not a kind of incest, to take life
 From thine own sister's shame? What should I think?
 Heaven shield my mother play'd my father fair:
 For such a warped slip of wilderness
 Ne'er issued from his blood. Take my defiance,
 Die, perish! Might but my bending down
 Reprieve thee from thy fate, it should proceed.
 I'll pray a thousand prayers for thy death;
 No word to save thee. (III. i. 135-146)

「動物」、「卑怯物」、「人非人」、「破廉恥漢」とののしる Isabella, 更に、「まるで近親相姦のよう」だと誇大な表現をする Isabella, 最後に、単音節語をたたみかけ「すぐに死ぬのが一番いいのよ」(No word to save thee)と叫ぶ Isabella——ここにはヒステリックな言葉の洪水があるだけで、Derek Traversi も指摘するように⁽²³⁾、彼女の美徳の中の、強情で自己中心的な一面が垣間見られる。Isabella のこのような性格は人生に対する経験が乏しいことを示すものであり、彼女の教育は、R. Miles の言うように⁽²⁴⁾、公爵によってなされるのである。第五幕第一場、Isabella は Angelo の助命を公爵にこうお願いする。

I partly think
 A due sincerity govern'd his deeds
 Till he did look on me. Since it is so,
 Let him not die. My brother had but justice,
 In that he did the thing for which he died;
 For Angelo,

His act did not o'ertake his bad intent,
 And must be buried but as an intent
 That perish'd by the way. Thoughts are no subjects ;
 Intent, but merely thoughts. (V. i. 443-452)

これはこの劇における Isabella の最後の台詞である。ここには、以前の修辭的技巧や大袈裟な表現は姿を消している。この平易な言葉で淡淡と語られる Isabella の台詞には、公爵の導きで、より豊かになった彼女の性格がうかがえるのである。

(5)

最後に、Claudio の言葉のみてみよう。この劇で彼が登場する場は非常に少ないが、彼の言葉はよくその機能を果している。

第一幕第二場、監獄につれて行かれる途中 Lucio に出会う Claudio は、その理由をこう説明する。

From too much liberty, my Lucio, Liberty,
 As surfeit, is the father of much fast ;
 So every scope by the immoderate use
 Turns to restraint. Our natures do pursue,
 Like rats that ravin down their proper bane,
 A thirsty evil ; and when we drink, we die. (I. ii. 117-122)

「いい気になりすぎた。」「羽目をはずしすぎた。」という言葉のくり返し、「食いすぎる」と、あとで「食えなくなる」という対比には、性に溺れた罪を率直に認める Claudio の性格がうかがえる。また、「毒をがつつ食う鼠」の比喩で、知らず知らずそれに陥る人間性の弱さが見事に洞察されている。

更に、Claudio はこう話し続ける。

Whether it be the fault and glimpse of newness,
 of whether that the body public be
 A horse whereon the governor doth ride,
 Who, newly in the seat, that it may know
 He can command, lets it straight feel the spur. (I. ii. 147-151)

前の Claudio の台詞で、「毒を食う鼠」の比喩のうまさを指摘したが、ここでも、人民を「馬」に、統治者を「その鞍に新らして乗った人」に、法を厳しく実施するのを「拍車をかける」という風に、乗馬の比喩で政治の状態を具体的に描き出している。

さて、ここで、第三幕第一場、Isabella に明日は死ぬものと覚悟して下さいと言われ、死の恐怖について語る Claudio の台詞を取り上げてみたい。

Ay, but to die, and go we know not where ;
 To lie in cold obstruction, and to rot ;
 This sensible warm motion to become
 A kneaded clod ; and the delighted spirit

To bath in fiery floods, or to reside
 In thrilling region of thick-ribbed ice ;
 To be imprison'd in the viewless winds
 And blown with restless violence round about
 The pendent world : or to be worse than worst
 Of those that lawless and incertain thought
 Imagine howling, —'tis too horrible.
 The weariest and most loathed worldly life
 That age, ache, penury and imprisonment
 Can lay on nature, is a paradise
 To what we fear of death. (25) (III. i. 117-131)

B. I. Evans は、Claudio が *Measure for Measure* の中でロマンチックな言葉を話すのを許されている唯一の人物であることを指摘しているが⁽²⁶⁾、それはこの台詞について言われることであろう。ここでは、言葉のひびき、リズムそのものが、死の恐怖におののく Claudio の感情の喘ぎを伝えている。最初の二行には単音節語を重ね、その中に、“obstruction” という多音節語を入れたため、対照によりこの語が強められ、死がいっそう印象づけられている。また、「生気を失い冷たくなった諸器官」(118行)と、「暖かく躍動する肉体」(119行)との対照、「一塊の土くれ」(121行)と「厚い厚い氷の世界」(122行)との対照、更に、「喜悦に溢れる」(120行)、「体の凍りつく」(121行)、「身の毛がよだつ」(127行)という感覚的な言葉の多用などにより、死の恐怖を見事に伝えている。このように、Claudio は詩的な言葉で自分の弱さを吐露するが、逆に Isabella にののしられる。同幕同場、上の台詞の直後、修道僧に変装した公爵に死ぬ覚悟をするようすすめられる Claudio は次のように述べている。

Let me ask my sister pardon ; I am so out of love with life that I will sue to be rid of it. (III. i. 171)

この言葉には、すべてを諦め、死にのぞむ彼の素朴な性格がみられる。

以上、*Measure for Measure* における主な登場人物、Duke, Angelo, Isabella, Claudio の言葉を取り上げ、それぞれの言葉が人物の性格描写に、また劇の雰囲気や醸しだすのどのような役割を果しているか考察を加えてみた。

注

- (1) Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose* (Methuen, 1968), p. 314.
- (2) E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's Problem Plays* (London, 1950), p. 123.
- (3) J. M. Nosworthy (ed.), *Measure for Measure (New Penguin Shakespeare)* (Penguin Books, 1969), p. 40.
- (4) B. I. Evans, *The Language of Shakespeare's Plays* (London, 1952), p. 108.
- (5) R. Miles, *The Problem of Measure for Measure: A Historical Investigation* (Vision, 1976), p. 186.
- (6) M. M. Mahood は、*Shakespeare's Wordplay* (London, 1957) の中でこの言葉について次のような興味ある考察をしている。

“Dr Wilson maintains that *weeds* is ‘impossible’ and accepts Walker’s *wills* in preference

to Theobald's *steeds*. *Weeds*, however, is not impossible, only irrational. Theobald's rational *steeds* is good, because it echoes the image, used by Claudio in the previous scene, of the body politic as a horse ridden by the deputy. Shakespeare may have intended to write *steed*, but *weed* is, I think, his word rather than the copyist's or compositor's, because in its double meaning of 'tare' and 'dress' it fits excellently into the thematic pattern of the play," (pp. 17-18)

- (7) Whether it be the fault and glimpse of newness,
Of whether that the body public be
A horse whereon the governor doth ride,
Who, newly in the seat, that it may know
He can command, lets it straight feel the spur ; (I. ii. 147-151)
- (8) C. F. E. Spurgeon, *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us* (London, 1935), p.286.
- (9) A. P. Rossiter, *Angel with Horns* (Longman, 1981), p.164.
- (10) Milton Crane, *Shakespeare's Prose* (Cambridge, 1951), p.110
- (11) Miriam Joseph は *Shakespeare's Use of the Arts of Language*, (Columbia, 1947) の中でこの語を次のように説明している。"Antimetabole is akin to logical conversion in that it turns a sentence round." (p.81). この台詞の中では, "The goodness that is cheap in beauty makes beauty brief in goodness" が antimetabole" である。
- (12) Miriam Joseph, *op. cit.* "The figure *propositio* is a brief summary of what is to follow." (p.115)
- (13) Milton Crane, *op. cit.*, p.113.
- (14) J. M. Nosworthy, *op. cit.*, p.171.
- (15) J. M. Nosworthy は, この劇の中で, "irony" が目立つ特徴の一つであることを指摘している。*op. cit.*, p.123)
- (16) Mark Van Doren は, *Shakespeare* (London, 1941) の中で, この台詞について次のように述べている。"Angelo's soliloquy when he finds his famous virtue yielding ground to lust for Isabella is too conscious of itself as document and cas-history to be convincing as revelation." (p. 219)。また, J. W. Lever は, *Measure for Measure* (Methuen, 1965) の中で, この台詞の179行から181行に, 次のような適切な注をつけている。"Angelo imagines himself as an anchorite tempted in a dream by Satan disguised as a virgin saint." (p.50)
- (17) Derek Traversi, *An Approach to Shakespeare 2* (Holis & Carter, 1938 ; Third edition, 1969, p.69.
- (18) Angelo の名前が "angel" を連想させるのは皮肉である。
- (19) W. W. Lawrence, *Shakespeare's Problem Comedies* (New York, 1931), p.120-121.
- (20) E. C. Pettet, *Shakespeare and the Romance Tradition* (Staples, 1949), p.159.
- (21) このイメージについて B. I. Evans, *op. cit.*, p.112. 参照。
- (22) Miriam Joseph, *op. cit.*, p.232.
- (23) Derek Traversi, *op. cit.*, p.76.
- (24) R. Miles, *op. cit.*, p.226.
- (25) J. W. Lever は, Claudio のこの台詞について次のように述べている。"Claudio's speech is implicitly a reply to the Duke's discourse, and springs from the same amalgam of pagan philosophy and Christian tradition. His conception of punishment in the after-life is based upon classical descriptions of Hades tinged with a Lucretian scepticism." (*op. cit.*, p. 74)
- (26) B. I. Evans, *op. cit.*, p.113.